

ふだん、店の中ではぜったいにかけないCDが何枚かある。その中の1枚、ウラジミール・ヴィソーツキイの「大地の歌」は、数年前にNHKの特集番組で紹介されて知った。

60年代から70年代にかけてのロシア吟遊詩人ヴィソーツキイ。一方的な農業集団化とスターリンの粛清、その後のファシズムの凶暴な攻撃にたえたロシアの民衆のこころを、一身に追体験する詩を書きつづけた。当然、当局からはずっとマークされる。しかし、1980年享年42歳の彼の葬儀には、旧ソ連各地から20万人の民衆が集まったという。

ある日本のレコード店(レコード会社ではなく)の私家版CDのようなその1枚を、やっとのことで手にいれたとき、わたしは待ちきれなくて店のデッキにかけた。

「なんだ、これは？」夫が怪訝な顔で、スピーカーを見上げた。広沢虎造とルイ・アームストロングばりの迫力だから、けっして澄みきった声ではない。自分には魅力的な歌だが、夫にはそうではなかった。こればかりは、どうしようもないとわかって、それ以来、ヴィソーツキイを聴くときは、夫の不在のときを選び、玄関や窓を閉めきって、ボリュームいっぱい独りで堪能することになっている。1968年4月、イスラエルへの陸路でモスクワに2泊した自分は、ヴィソーツキイを知らなかった。発禁だった彼の歌を、密かに聴いていた人々にも、気づかなかった。だから今、ヴィソーツキイを聴くと、当時の自分の無知が悔やまれて、どんよりとしたあのモスクワの空に、苦い思いがはせる。